

厚い信頼を得ておられます。

今まで民生委員九年間、少年輔導員二十三年間、交通安全推進委員八年間勤められ、現在は地域安全推進委員として活躍しておられます。

(島根県 本田 吉則)

私の人生記

シベリア抑留苦難の思い出

愛媛県 橘 兵馬

愛媛県温泉郡浮穴村大字井門一七番地に、父橘熊之亟の長男として大正三(一九一四)年一月十四日生。

家は代々農業を営んでいます。昔は農家の長男は農家を後継していかなければいけなかった。そのため農家の長男は上の学校へ行く必要はないと父に言われ、私は浮穴尋常小学校へ行った。小学校六年、高等科二年を卒業し、それからは夜間中学に徴兵検査まで熱心に通った。

毎年皆勤で賞状と景品を貰った。

徴兵検査は昭和九(一九三四)年、道後公会堂で行った。昔は青年訓練所へも真面目にかよった。そして一通りの軍隊教育は受けていた。私は事情により徴兵検査も一年遅れた。そのため教練をう

けた時間超過で徴兵官より表彰を受けた。我々の時代はまだ戦争もなかったのであまり兵隊も必要なかったのか、私は少し身長が足りないとかいつて第二補充兵役であった。それから後、戦争も始まり十七年十一月満二十八歳で召集令状を受け、善通寺西部三十九部隊に入隊し三日ほどの間に防寒具を渡され出発、満州虎林に到着。満州第九百三十部隊に入隊。二十年二月頃転属、平陽の部隊が九州へ内地警備に出た留守部隊で新編成。それがまた三方所へ分かれ、それぞれソ満国境警備に ついた。我々は平陽の監視隊十八号陣地へ行った。山の麓に小さな兵舎があつて、五十人余りの兵隊がいて、交代で山の上で望遠鏡でソ連陣地を監視していた。

それから数カ月して八月八日の真夜中、雨が降る鳴るの随分しけた晩であった。ソ連の飛行機が上空を飛んで、姿は見えぬが音をブンブンとさせたので全員外へ出て警備についた。しばらくすると音がやんだので兵舎の中で待機しているとまた

二度目やってきたので、また警備についているとしばらくすると音がやんで、もう来なかったもので、隊長が兵隊に「夜中にしばらく起こしていたから、明朝は八時まで起床延期する」との事で、皆ぐっすりと寝込んだ。私はそれから馬屋当番の交代で当番に付いた。馬は本隊へ連絡に帰る時に乗る乗馬が四、五頭いた。私はその夜あまり寝ていなかったため馬屋の中に馬糧が置いてあった上に腰を下ろし、思わずとうとうとしていたところが九日未明、バリバリと音がして馬屋のトタン屋根もカラカラと音がした。私は立って窓から外を見るとたくさんのソ連兵が兵舎の方を撃っていた。私は出入口から出たら見つかるので馬の口元の方に板が二枚外れていてムシロが張ってあったので、そこからはい出て五十メートルほど行った所の深い草むらに飛び込んで伏せた。すると同時に向うから自動小銃でバリバリと撃った。弾はバラバラと前に落ちた。ピュンピュンと上も飛んだが弾は当らなかった。その後すぐガサガサと探しにきた。

二間ぐらい手前まで来たがよう見つけずに返って行った。それは軍犬であった。兵舎はバリバリと焼かれてしまった。その日一日中マアチョで糧秣を運んだらしい。私は草原から外へ出る事はできない。日が暮れると音はやんだが、そこらへ野宿したらしい。夜が明けるとまたガタガタとなり始めた。その日、午後になってようやく音がやんだので、夕方草原をそろそろとはい降りて下の小川の水を飲んでやつと息をつないだ。

丸二昼夜飲まず食わずで腹は減る、喉は乾くし、本隊へ帰る途中草原で二、三回横になり、ここでこのまま死んだほうが楽なのだと思うたが、ここで狼の餌になるより生きられるだけ生きてみようとなつた立ち上がり、とぼとぼと歩いた。そして本隊へ帰った。これが一回の苦労話である。

それから間もなく終戦になり関東軍はラコとハインと二カ所に集結した。日本軍はここへは長くは置かない、ウラジオストックから乗船して青森へ着く、近日中に全員帰すとソ連にうまくだま

されていた。上官もすべての者が信用していた。

間もなくソ連の軍医が身体検査して、使い物になるのとならないのを分けたらしい。使えない者は陸軍病院へ入れておいて間もなく帰したらしい。毎日千人単位で出て行きよるのを見て、内地へ帰してもらいよるのかと思ひ羨ましく思われた。数日後自分らの番が来た。牡丹江の駅へ行つて見ると貨車が止まっていた。大きな有蓋車で、随分長く繋いでいた。中は中段に座がこしらえてあつて、上と下へ座つて一貨車へ百人ぐらいつめられた。

列車の前後には歩哨が銃を持って一段と高い所で見張っていた。数日かかつてテルマという所へ着いて降ろされた。日も暮れていて電気もない真つ暗な所へ入れられ、白樺の葉っぱを焼いて明りをとり、小さな入れ物に粟飯を入れており、それを二人で分けて食べた。そこは昔囚人が入っていた所で古い建物であつた。外側に縁がついており、そこへそのまま横になつて寝た。何も敷く物も着る物もない。夜中頃から随分冷えてきて寒かつた。

夜が明けると先ず最初は薪拾いから始まつた、その後ほうぼうの収容所へ分けられ、転々と収容所も変わらされた。皆ぼろいため道具なしで壁を塗り修繕して入つた。

最初の冬、保線をやっていた酷寒時の事、両方に低い山があり、その間を線路が通っていた。一日中太陽の当たらない所で、山から水が流れ落ちていた。線路の横のたまりへ落ちていたので夜間はその溜り水を三分間に一回ぐらい棒切れで混ぜないと、氷が張ると汽車が脱線するのでその作業を四、五人で一晩中やらされた。夜間は零下四、五〇度に下がるので実に辛かつた。

夏は長い草を五尺ぐらいの柄のついた大鎌で刈つた。二、三日乾燥させ、背中に背負い一カ所へ集め、縦横十二メートルぐらいの山に積んでおいて冬分の馬糧にする。

その冬からは主に伐採をやらされた。直径メートルぐらいの原木の足元の雪をかきのけ、二人びきの大鋸で裏びきをシタポール(おの)で切込を

して本引きをする。切り倒して枝打ちをし枝焼きをし、大きさによつて三メートル物や五メートル物に切つた。仕事にはノルマというものがあつて、ノルマを完遂して一〇〇パーセントの仕事をしたことになる。一〇〇パーセントの仕事が出来なかつたら一日一回一切れの黒パンを減らされて、一〇〇パーセント以上仕事が出来た組が増して貰えた。黒パンは雑穀の原料で、甘味も塩分もなく酸味が少々あるだけで、日本ではとうてい食べられる物ではありません。人間も飢えそうな時には何でも食べられる。作業に行つての昼食は樅まゆみの木の幹に付いている苔をとつて焼いて食べたり、めつたにいない蛇がいたら取つて皮をはぎ、焼いて食べていた者もいた。作業の帰りには野草を採つて帰り、ペーチカの上で炊いて食べた。煙草を吸う人は木の枯れ葉を取つて吸っていた。収容所によると水の不十分な所は他所からマアチョで運んでいた。

私がシベリアへ行つた最初の事であつた、喉が

無題

愛媛県 佐々木 義 廣

ガラガラに渴いてたまらなかつた時の事、池に溜まっていた木の葉っぱの落ち込んでいた腐り水をくんできて飲んだ。また伐採の最中頃の事、最も厳寒時、積み込みの組にvari、夜間作業で積み込みをやらされた。道路端の木材をトラックの横に二本のりん棒をかけ肩をすけてまき上がる、このような真冬の夜間作業には随分こたえた。一番長い間伐採をやったが、この作業も危険性もあった。次第に作業場が遠くなるので、腹力もない上にソ連製の大きな重い靴を履かされ重い足を引きずりながら歩いていった。

このような苦勞の毎日もいつしか過ぎ、軍隊生活三年、シベリア抑留四年、満七年間の苦勞を耐え、時には生死の境をさまよい、飢えと寒さと重労働にも耐えてナホトカ乗船信陽丸にて舞鶴に昭和二十四年八月上陸、無事帰る事の出来た事を不思議な事に思われます。

患者、家族等平壤へ空輸開始、ソ連軍進駐。
ロスケ軍師が来る二日前の八月末日、「参謀の判断が誤りだった。直ちに全機出動。必要要員から平壤へ空輸、平壤から鉄道にてとにかく三八度線以南へ南下せよ」との命にて久しぶり全機出動準備。

先ず隣の陸軍病院の全員と官舎にいた家族を乗せ平壤へ飛行する。私は病身のため「その故障機を修理して次の飛行集団に入って平壤へ飛び、南下して内地に先に帰るように」と隊長より命を受ける。早速機付兵と飛行機整備故障探求を実施、案外早く修治しガソリンを補給して飛行準備完了する。至急官舎に帰り私物整理し、一人二梱まで、規定であったがどうしても捨てるに忍びず荷物三梱をとりあえず愛機に搭載し離陸準備に入ってい